

日台交流60年、思い出すまま

松本 あやひこ
彥彦

20代半ばから始まった私の台湾との交流も60年に及び、訪台の回数も200回を越えている。今年に入ってから春節前の歳末風情が漂う2月4日から母校中央大学の卒業生仲間と台湾旅行を楽しんできた。金門島、澎湖島へは何度か行ったことがあったが、今回はこれまでなかなか行く機会が無かった馬祖島へ足を伸ばしてきた。

馬祖島は常に強風が吹いていてこの季節は寒いこともあり観光で行く人はいないといわれている。「行きは良いよ、帰りはこわい」という諺があるが、その通りの馬祖の旅であった。

往路は台北・松山空港から双発のプロペラ機で1時間足らず。風もなく温暖な陽気で正直拍子抜けしたのだが、翌日は濃霧のため飛行機は全便欠航となった。一泊の予定だったため、急拠船便に切り換え台北に戻ることになった。5,000トンのフェリー「新台馬」に乗船し、朝10時に南竿の福澳港を出港。途中東引に寄り、春節のため帰省する兵隊さんたちを乗せて基隆港へ。大揺れの8時間半のとんだ船旅となった。シケの台湾海峡はさすがに凄い。

中央大学には「学員日華友好会」という組織がある。学員とは同窓生のことで、中華民国（台湾）との友好を図ろうという有志の会である。

少し紹介させていただく。

1999年3月、大学が主催して台北の円山大飯店において「特別卒業証書授与式」が挙行された。戦前中央大学で学んでいた台湾からの学生たちが終戦とともに復学できなくなってしまった。その人たちへの大学の特別な配慮である。この式典には総長、学長、各学部長のほか多くの学員も出席

し、私も学員の団長として参加した。台湾のテレビ局が中継をし、新聞各紙も大きく報道するなど盛り上がった式典であった。

その年の9月に台湾中部を震源とする「集々大地震」が発生し、学員有志が義援金を贈るなど台湾に対する関心が一段と高まって翌2000年にこの「友好会」が設立されたのである。

友好の証として日本の桜を台湾各地に植え、コロナの時期を除いて毎年20名前後の仲間と友好の旅を続けてきている。



2011年3月
海部元総理と友好の桜の碑の前で
左：筆者
(写真：筆者提供)

桜の話であるが、なん度か試みてはみたが、染井吉野は台湾では育たない。しかし河津桜、大漁桜、大寒桜などは2月中頃から花を咲かせてくれる。

これらの桜を「友好の桜」と称し、海部俊樹元

総理にこの文字を揮毫していただき石に刻んだ記念碑を植樹地に設置している。なかでも2005年に台北の中正紀念堂、2011年に桃園・中壢の国立中央大学に植えた桜は立派に育ち、今は花見の名所として台湾の人々を喜ばせている。特に、国立中央大学キャンパス内の桜は、2011年3月11日東日本大震災の日に海部元総理も同行して20数名の学员仲間が植えたものである。今年も咲きかけた桜を見てきたが、見る度に特別な感慨が込み上げてくる。

私は中央大学の日華友好会会長のほかに、日台スポーツ・文化推進協会理事長という二足のワラジをはいている。2012年にこの協会が主催をして東日本大震災への支援に対する「謝々台湾」イベントとして烏山頭ダム近くの八田與一紀念公園とその周辺に200本の桜を植えたことがある。八田技師と同郷石川県出身の森喜朗元総理にご同行を願い、日本からも大勢の人々のご参加をいただいた。

農田水利会、政府観光局、頼清徳総統が市長時代の台南市も絶大な協力をしてくれた。しかし桜は2年後には全滅に近い状態で枯れてしまった。悲嘆にくれていた私は、台湾の友人から霧社に植えたらどうかとのアドバイスを受けてその友人に案内されてそこへ出かけた。



日台友好“絆の桜”植樹式前夜
中央：森元総理
中央右：頼清徳台南市長（当時）
左から二番目：筆者
（写真：筆者提供）

霧社とは現在の南投県仁愛郷の昔から呼ばれている地名である。1200から1300メートルの高地の山あいの部落であり、気候的には桜に適している所である。

その郷長に「日本の桜は歓迎するが、まだ事件¹の後始末が終わっていないじゃないか」と言われ、2015年2月に日台スポーツ・文化推進協会と仁愛郷公所の共催で“霧社に桜を”平和友好祭と桜植樹式を挙行了た。

式典には日台双方合わせて約500名が参加し、フィナーレには原住民の女性たちの発案で、みんなで東京音頭を踊って別れを惜しんだ思い出がある。交流協会からは沼田幹夫代表（当時）にご臨席をいただいた。

その後、事件による全ての犠牲者を弔うための慰霊碑を建立しようということになり、石碑も購入し碑文もすでに刻んで用意してあるのだが、政争が絡んで頓挫したままになっている。

もう一つ、桜にまつわる話だが、私は昨年5月8日に仲間たちと烏山頭ダムで催された八田與一技師の「逝世83周年追思紀念会」に参列した。その式典で日本台湾交流協会の片山和之代表が前述した森元総理が植えた桜が枯れて今は「絆の桜」という石碑だけが残っている。桜をなんとかしなければという趣旨の話がされた。

私は、我が意を得たりと思い、台湾の友人に依



頼清徳総統と旧交を温める筆者
（出典：総統府）

1 この事件とは、日本統治下の1930年（昭和5年）10月に当時の台中州能高郡霧社で起こった原住民による抗日暴動に始まる一連の事件のことであり、地名から霧社事件といわれている。日本人の運動会が行われる朝、約300人の原住民の若者が日本人を襲撃し134名を殺害。これに対し日本軍が報復をし約1000名の犠牲者を出した凄惨な事件のことである。

頼し八田技師の記念基金会、ダムや公園を管理する政府の農業部農田水利署に「絆の桜」復活に協力してもらえないか相談をしてもらった。その結果吉報がもたらされ、この3月17日に植樹のセレモニーを行うこととなった。3月17日というのは、「華の会」という女性中心の親睦の会がメンバー約20名で烏山頭ダムに行く予定の日である。私もそのツアーに同行するため植樹セレモニーをその日に合わせて実施することにしていたのである。台湾側のご配慮に感謝したい。

華の会一行も台湾旅行の中でこの記念行事に参加することになっている。

振り返ってみるとこの60年間には様々な交流をやってきたのであるが、一つだけ記しておきたい。

「黒潮泳断チャレンジ」と名付けたイベントである。やはり東日本大震災への最初の「謝々台湾」イベントの一つである。

岩手、宮城、福島三県の知事から預かった感謝のメッセージを6人の若者に与那国島から台湾の蘇澳まで泳いで届けてもらうという破天荒な企画であった。この海峡には世界三大潮流ともいわれる激しい黒潮が流れており、もちろんサメもいる。2011年9月17日、明治大学OBの鈴木一也君をリーダーとする6人の猛者が与那国島のナーマ浜から台湾へ向けて泳ぎだしたのだが、台風の余波を受け3メートルのうねりがあり危険な状態だった。リレー式で交代をしながら漆黒の夜も泳ぎ続け、悪条件の中を約50時間かけて120キロを無



出発を前に記者会見会場にて
(台北駐日経済文化代表処、港区・白金台)
(写真：筆者提供)

事に泳ぎ切ったのである。メッセージは台北のホテルの会場で待つ楊進添外交部長に手渡された。会場には日本への救援にかけつけてくれたレスキュー隊の隊員をはじめ約500人の人々が集まっており、泳者6名を“6勇士”と称えてくれた。実行委員長を務めた私は何も事故が起こらなかったことに安堵した。このイベント実施に当たっては10名程で実行委員会をつくり協議を重ね、念入りに準備をした上でのことではあったが、今思うと随分危ないことをやったものだどゾッとする。日台双方の政府関係者の異例な協力と支援に今でも感謝をしている。

そもそも60年続いた私と台湾との交流のきっかけが一。

20代の半ば頃、私は自民党青年局に勤務していた。海部俊樹青年局長、小淵恵三青年部長という時代だった。ある日佐藤栄作総理から青年局に台湾の青年たちと交流するように指示があった。そこで小淵部長が責任者、私が事務局を担当して交流が始まった。これが現在まで続いている青年局の台湾交流の原点である。

1972年田中内閣が誕生し、「日中国交」への動きが慌ただしくなった。大平正芳外務大臣は、日中国交に先立ち、これまで友好関係を維持してきた中華民国に対し、日本政府の特使を派遣する必要があると考えた。しかし中華民国側は別れ話に



1967年来日の蔣経国（国防部長）を囲んで
前列中央：蔣経国（国防部長）
前列中央右：海部俊樹青年局長
前列右端：小淵恵三青少年部長
後列左から三番目：筆者
(写真：筆者提供)

くる特使は受け入れられないと頑なに拒否をし、特使派遣は難航した。

私は大平大臣からの要請を受け、椎名悦三郎特使の受入交渉をした経験がある。9月17日から19日までの椎名特使の訪台は実現したものの、9月29日には日中国交正常化となり、即日日華断交となった。9月29日は当時32歳の若者だった私が将来どんな人生を歩むか分からないが、中華民国（台湾）との交流は生涯かけて続けていこうと心に誓った日でもあった。

あれから半世紀以上がたち、私も86歳となったが、自分との約束を果たし続けて今日に至っている。

筆者略歴

中央大学法学部卒業。運輸大臣秘書官、労働大臣秘書官、自由民主党総裁秘書、内閣総理大臣筆頭秘書を歴任。2005年に日台・スポーツ文化推進協会を設立し、理事長に就任。2011年に中華民国外交部より外交奨章、2016年日本外務省より外務大臣表彰を授与される。2022年より中央大学・学員日華友好会会長に就任。

岡山理科大学、文化女子大学、杏林大学大学院にて教鞭をとる。